

# 情報分析

松浪丞

誘拐事件などでは、発生したときは報道せずに、犯人が逮捕されてから初めて公表されるのが常だ。そのときニュースキャスターがこんなふうに補足説明する。「当番組では人命尊重の立場から、発表を控えていました——」

それを聞いて一般の視聴者は、なるほどこんな事件があったのか、と妙に納得したり、捜査関係者の尽力に心の中で感謝したりする。しかし考えてみれば、我々の知らない所で知らない事件や事故が、けっこう発生しているということではないだろうか。たまたま公表されたから大衆の知るところとなったが、なかには当局の判断によって、闇から闇に葬り去られる事件や事故もあるのではないだろうか。

「これは一般国民には知らせない方がいい。公開するとかえって動揺したり、社会を不安にさせるだろうから——」

ヘソ曲がりの当方などは、ついそんなふうに勘ぐってしまう。

一九八〇年から九〇年頃にかけて、ソ連が軍備を増強している、新兵器を開発していると、漫画や空想小説そしてアメリカの映画までもさかんに喧伝していた。世界最強の水陸両用部隊が、いまにも北海道に上陸してくる、高性能の原子力潜水艦が突然日本海の沖に浮上する、という勢いだった。そこで自衛隊も北海道を最重要拠点とし、精強の機甲師団を優先して配備した。その当時の陸士の着用した野戦迷彩服の色調は、クマザサパターンと呼称され、今に語り伝えられている。

では当のソ連軍の実情はどうだったのだろうか。軍事力を増強していたのだろうか。ソビエト崩壊の数年まえから、軍人の給与の支給は滞りがちになり、訓練もほとんど行われなくなっていた。ほんらい海中を航行していなければならぬ潜水艦は、浮上して港に繋留され、潮風にさらされて赤錆びていた。乗組員たちは埠頭に並んで釣り糸を垂れていた。なにしろ給料も燃料も支給されないのだから、できるだけエネルギーを温存して、食料の確保に専念する必要があったのだ。むろん他国へ侵攻する余力はないし、新兵器の開発にも手は回らない。これは軍事偵察衛星の写真からも明らかだった。

にもかかわらず弱体化した真の姿は、なぜ報道されなかったのだろうか。それはソ連脅威論を振りかざしていた方が都合が良かったからだ。防衛の関係者も、外交の立場からも、

また政治家にとっても。ソ連を仮想敵国にして危機感を煽れば、要求した予算はきちんとして計上されるし、装備品も満額揃えてもらえる。なによりアメリカのご機嫌取りにはうってつけだ。もし仮想敵国が弱体化している、などと真実の報道が流布されたら、自衛隊の存在意義すら希薄になるといふものだ。

かくして正しい情報は国民に伝えられなかったが、それを非難する声は少なかった。ただ国にも国民の感情にも余裕があった。二十世紀を迎える頃でも、我国の人口は微増していたし、税収もわるくなかった。バブル崩壊はあったが、そのうち景気も回復するだろう、という楽観論が大半だった。寝た子を起す必要はない。民はよろしむべし、知らしむべからず——（論語）

ところが正しい情報が生かされず、国家と国民が危機に瀕した事例ももちろんある。一九四五年というから、第二次世界大戦の終結の年だ。この年の二月に日本人の知らないところで、日本国の命運を左右するような、重大な密約が取り交わされた。それは黒海に突き出したクリミア半島で行われたヤルタ会談だ。ここに集まったのは米のルーズベルト大統領、英のチャーチル首相、露のスターリン連邦書記長で、ドイツ降伏三箇月後に、ソ連は日本に宣戦布告をして侵攻するという驚愕の取り決めだった。この密約は当然の如く極秘中の極秘とされた。なにしろルーズベルト急死後に就任したトルーマン大統領ですら、知らされていなかったのだから。

ところがポーランドの情報将校がこの密談をスッパ抜き、中立国のスウェーデンに滞在していた日本の駐在武官に内容を提供した。当時、連合国軍に包囲されて敗色が漂う母国に、ソ連が侵攻などすればひとたまりもない。武官は、すわっ天下の一大事とばかり、急いで本国の参謀本部に打電した。——ソ連は、ドイツ降伏後三箇月で日本に宣戦布告をし、大挙して侵攻してくる。一刻も早く対策を取られたし。緊急事態、緊急事態発生——

その電報はまさに天の啓示であり、神からの賜物ともいえる貴重なものだった。じつさい五月九日にドイツが無条件降伏したあとに、ソ連軍はきっかり三箇月後に満州になだれ込んだのだから。駐在武官の報告や尊ぶべしである。しかし、この重要きわまりない情報に、まったく活用されなかったのは、史実が示す通りだ。日本陸軍は、ほぼ不意打ちの形でソ連軍の侵攻をゆるし、大敗を喫してしまった。準備も命令もなかったから当然ともいえるが、あまりにも一方的な戦いだった。軍人だけでなく国民の多くが、まるで火事場泥棒のような蛮行だ、と言いつつたのも宜<sup>むべ</sup>なるかなだ。悲惨なのはなにも知らされていなかった現地の人だ。友軍の援護も逃げる退路も断たれて、ソ連軍のなすがままに蹂躪された。降伏した兵士も武装解除を受けたあとにシベリアに抑留されたが、過酷な強制労働

と栄養不足に厳しい冬の寒さが襲いかかり、次々と倒れていった。

なぜ有用な情報がありながら、それを生かさずとらなかったのだろうか。当時の指導者たちはなぜ判断を誤ったのだろうか。外交のトップは、戦前に締結された日ソ不可侵条約を理由に、ソ連の参戦はありえないとみていた。陸軍の首脳にしても、ヨーロッパ戦線の戦後処理や軍隊の再編成で、ソ連の極東進出は大幅に遅れるという認識だった。昭和天皇の信任厚い鈴木貫太郎首相に至っては、ソ連に仲介を依頼して米英との戦争を終結させると本気で考えていたのだから、この人物の国際感覚はいったいどうなっていたのかと疑わざるを得ない。

もしソ連侵攻を重大な危機ととらえ、軍事、外交、政治の要人が結集して知恵と対策を出していれば、多くの人命が救われ、わが国固有の領土も失わずにすんだであろうことは、想像にかたくない。そしてそれは十分に可能だった筈だ。日本は軍事でも外交でも勝機を掴めなかったが、それ以前に情報の収集と扱いで大敗していたのだ。現実の戦争の敗北は、情報分析の失敗の具現化にすぎないと言いつける者さえいる。極論すれば日本は、すでに敗けた戦争を始めてしまったのだ。以上を要約するとだいたい次のようになる。

- ① 正確な情報を有効に活用して成功する。
- ② 正確な情報の存在は知っていたが、活用せずに失敗する。
- ③ 誤った情報を正しいと判断して大敗する。

日清戦争、日露戦争、第一次大戦までの日本は、おおむね①だった。大戦後に発足した国際連盟におけるわが国の地位は、堂々の常任理事国だったのだから恐れ入る。もちろん有色人種では一国だけだった。日本は連合国の主要メンバーであり、世界に先がけて人種差別撤廃法案を提出して、各国の注目と称賛を浴びた。

その後の日中戦争、第二次大戦では、②と③になり下がり、枢軸国に加担して非難と批判にさらされた。戦後日本は敗戦の痛手から立ち直り、高度成長を遂げて先進国に仲間入りを果たしたかに見えるが、教訓は生かされているだろうか。二十一世紀に入っすでに四半世紀を経過したが、少子高齢化、格差社会の是正、安全保障、財政の健全化、エネルギー政策などの重要課題が山積しているのが現状だ。

わたしは、T電が発注した柏崎刈羽原子力発電所の建設工事に従事した。五号機、六号機、七号機を完成してしばらくしてから、新潟県中越沖地震が発生した。震度五の揺れで安全対策の不備が露呈し、屋外に設置した変圧器が異状をきたして、黒煙を上げながら炎

上した。その教訓を活かしていれば、東日本大震災における福島原発の炉心溶融は未然に防止、乃至は軽微に抑えられたと考えている。都合の悪いことはひたすら隠し、臭いものには蓋をするやり方は、戦後民主主義になっても尾を引いているようだ。T電力ばかりを責めるのは酷かもしれないが、隠蔽体質は改めるべきだろう。

わが国の優秀な頭脳と勤勉な国民性は、自他ともに認めるところである。さまざまな情報を多方面から収集し、多角的に分析して有効に活用すれば、未来は明るいと思うのだが、如何なものだろうか。わたしはそれに希望を託している。